

書評 宮内貴久著 家相の民俗学

著者	森 隆男
雑誌名	日本民俗学
巻	248
ページ	110-114
発行年	2006-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/1884

書評

宮内貴久 著

家相の民俗学

書評

森 隆男

A 5 版 / 309 ページ
本体価格：7,000 円
2006 年 4 月
吉川弘文館

本書は、中国から入ってきた家相という思想について、日本における受容と展開を説明し、あわせて住居観をさぐるうとしたものである。

中国や台湾、朝鮮半島など東アジア地域では、風水思想が都市や村落のあり方、墓地や住居の建設に大きな影響を与えてきた。日本では、そのうちの住居に関する部分が家相として普及したといわれている。しかし近代以降は迷信として排除され、研究の対象になることは少なかった。とくに民俗学の分野ではほとんどなかったといつてよからう。著者は近世に普及する家相書について歴史学の視点で詳細に史料を検討し、その上で自

●書評

●書誌紹介

「家相の民俗学」
「海港場横浜の民俗文化」
「学校の怪談」はささやく」
「刺青墨譜」
「現代都市伝承論」
「寺社縁起の文化学」
「近世祭礼・月次風俗絵巻」

身が収集した家相図を検証する。その一方で、家相を受容した民俗社会に注目し、具体的な検証を加えている。書名に「民俗学」を使用したところに著者の立場が示されている。

本書の構成と概容は次のとおりである。

第一章「家相書の展開」では、まず家相の理論的な基礎とされる陰陽道書を取りあげて、詳細な検討を加えている。その結果、屋敷地の形状による吉凶すなわち地相と暦・月日の吉凶が重視されているのに対し、建造物に関する記載が乏しく、家相が重視されていないと指摘する。ここでは三点の陰陽道書に記載された屋敷地の形状と吉凶について図示しながら比較検討がなされており、相違点もよくわかる。大工の技術書である木割書のうち五点についても検討し、陰陽道書とほぼ同じ内容で、やはり建造物を対象にしていけないとして、のちの家相書とは異なることを指摘している。古代から中世にかけて宮廷で展開した陰陽道が秘伝の形で近世に流行した家相学を受け継がれたとする説があるが、著者は一次資料の検証を通じてこれを否定する。

それでは現代につながる家相の歴史をどこに求めるのか。著

者が着目したのが中国から輸入された風水書である。徳川吉宗によって進められた政策の成果の一つである中国からの輸入書について、歴史学の成果を積極的に活用している。そして一八世紀の後半から始まった家相書の出版を取りあげ、これらの執筆者は中国から輸入された風水書を研究してまとめたとする。

執筆者にはのちに一派を形成する松浦東鷄のような専門家だけではなく、市井の商人なども多いという。ここで著者は当時の家相書を流派別に、さらに同一流派内においても徹底的に検証し、吉凶判断の方法は厳密に規定されているが、その結果の判断には柔軟な部分が存在し、多様な結果が生じることになると主張する。また建造物が家相判断の対象になった時期は一九世紀になってからであると指摘する。その上でこのような家相書の出版と流通を支えた背景として、一八世紀の中ごろに三都において書籍の出版事業が飛躍的に発展したことをあげている。ここに、著者は伝承のあり方が口頭から書籍を媒体にしたものへ転換する歴史を認めており、本書を貫く重要な視点といえる。これは第三章を展開する上での伏線になっている。

第二章「家相図の事例研究」では、著者が調査を実施した茨城県とその周辺地域で得た家相図二七四点について具体的に検証している。まず制作年代については一九世紀に入ってから始まり、幕末と明治二〇年代の二度のピークを経て昭和になって衰退するとしている。出版年代のピークとの間に認められる一〇年の時間差を、家相書の流通と読者が家相図を作成するために必要

な技術の習得に要した時間とみる指摘は鋭い。また家相学の拠点が古くは関西地方にあつたとする先行研究に対し、再考の必要性を提示している。

次に作成者について、陰陽師系の宗教者や家相諸派だけでなく多様な職能者が担当していたことを示している。家相図に記載された内容にはかなり差異があり、比較的簡潔な家相図が多いのは、その家が長期間にわたって増改築に対応できるためとしている。また竜脈や地脈という気の流れや、土地の形状の吉凶などの地勢論に言及した家相図がほとんどないことを示し、参考にしたのは『陰陽五要奇書』に代表される福建学派の風水であることを明らかにしている。

第三章「リテラシーと読書生活」では、主として明治以降のリテラシーすなわち読み書き能力について、山形県の置賜地方の資料をもとに展開している。前出のように著者は文字による伝承「書承」に関心をもち、民俗が文字文化により大きな影響を受けたとする。ここでは家相書についての記述はほとんどみられないが、家相書の出版と流通、それに伴う家相図を作成する習俗が普及する背景に、リテラシーの問題が存在すると考え、一章を当てていると考えていいだろう。

本章では統計資料を中心に分析を加え、伝承資料も活用している。明治三〇年代に活版印刷により出版量が飛躍的に増大するという。しかし、庶民にとってこの恩恵を受けるものは少なく、昭和初期の段階でさえ日常的に文字に触れる生活をしてい

る家は四分の一程度であったと指摘している。行政が設置した図書館も利用者層と人数を考えると十分機能していたとはいえないとする。このような状況で、書籍のもつ権威は大変高く、文字で記されているというだけで信じる者が多かったと主張する。当時の家庭では、毎年暮れに神社や寺院から配布される暦書がもつとも普通に所蔵されていた書籍で、安らかな日常生活を送るために不可欠であったという。本書は家相がテーマになっているが、実は著者もつとも主張しなかった部分が本章にあるのかもしれない。

第四章「明治期の家相見」では、明治二〇年代後半から昭和初期にかけて置賜地方で活動した家相見を通して、当時の社会における家相見の実態が具体的に描かれている。まずこの章の主人公である渋谷常蔵の生涯が紹介される。幼児期から宗教家としての修行を経て、家相見として活動するまでの過程が詳細に記される。これを可能にしたのは、渋谷自身が執筆した『渋谷常蔵一代筆記』が残存していたことも大きい。著者が自然災害や流行病など当時の社会状況について豊富な情報を収集した結果であることは間違いない。とくに江戸時代は米沢藩が厳しい家屋制限令を発して自由な普請ができなかったが、明治にはいると富裕層が新築や座敷の増築などを行なうようになり、さらに明治二〇年代から三〇年代にかけて新興地主が登場して土蔵や米倉を新築する際に家相判断が行なわれたとする指摘には説得力がある。その後、常蔵は家相図の作成はもちろん、地

図の作成についても能力を發揮し、地域の知識人としても活動し尊敬を受けたという。また厳しい修行を通して陰陽師系の宗教者としても信用を得るに至ったという。なお渋谷家に保存されている常蔵の蔵書六四点を分析して、常蔵が家相学を習得していく過程を明らかにした手法は興味深い。

本章はそれまでの章で展開された詳細な検証の積み重ねとは異なり、渋谷常蔵という家相見のライフヒストリーを通して、家相図と家相見の活動の意味するものを当時の社会の中で明らかにすることに成功しており、読み応えのある論考になった。

第五章「家相の民俗的展開」では、置賜地方を中心に家相図の作成者や、家相図を受け入れる社会の論理について述べている。まずこの地方で、ワカや法印と呼ばれる宗教者が果たした役割について述べている。とくに法印が知識人として尊敬を受け、加持祈禱だけでなく家相判断や暦判断を行なっていたことをあげている。さらに置賜地方で収集した家相図を分析して、作成者が専門の家相見だけでなく大工や郷土史家など多様な職業の人びとであったことを明らかにしている。また庭木の樹木の吉凶についても言及し、その中でナンマツという南側に植える松を「難を待つ」として嫌う習俗について、高島暦と正反対の判断が行われることがある点に注目し、語呂合わせがもつ民俗的思考の重要さを指摘する。そこに「口承」と「書承」の対立もしくは交差する構造を認めている。そして当時の地方の知識人が書籍の解説を通して新しい知識を創造することもあり、

今後、民俗学はこのような人々の活動についても取り組むべきと主張する。

終章では、本書で明らかにした成果の概略を述べ、今後の課題と展望に触れている。

評者も民家の調査の際にしばしば家相図を示されることがあり、間取りの変遷を考えるときの資料にすることはあつても、これを正面から取りあげて研究しようとは思わなかつた。家相図の多様性と、全国に残る膨大な事例を類型化し、分析することの困難さが予想できるからである。あえてこの作業に取り組み、精緻な検証を積み重ねて結論を提示した著者の精神力と旺盛なエネルギーに敬服せざるを得ない。その上で、評者の立場からみた若干のコメントを加えたい。

まず本書の成果全体を取りあげよう。前述のように著者の目指したものは民俗社会の中で家相を通して住居観を明らかにすることにあつた。ここには、かつて著者が奥会津地方で建築儀礼や日常・非日常の暮らしについて行なつたフィールドワークを通じて得た研究成果（宮内貴久「住居空間の創造とその維持——奥会津地方の建築儀礼の分析を通して」『日本民俗学』第一七九号 一九八九）などが影響していると思われる。ところが本書の構成をみた時、その多くが家相書および家相図の歴史学的研究と分析に当てられている。第五章「家相の民俗的展開」こそが本書の本論となるべきであろう。私が期待した部分もここにあつたが、内容的にも量的にも少し弱いとの印象をもつた。

とくに家相図の作成者や家相の実践者については述べられているが、家相の思想が人々の生活にどのような影響を与えたかについての論述が少ない。わずかに庭木の樹木について記述されているだけである。また現在に至るまでどのように変容したかについても知りたい。これらの点について、民俗社会で生活する者の立場から具体的に論じてほしいところである。

次に本書に使用された資料が、茨城県と山形県に偏っている点に不満が残る。全国にわたる資料の収集は困難としても、関西地方を含む西日本における事例の検討を加えることによつて、さらに有意義な成果になるだろう。その上で、第二章で求めた関西地方が古くは家相の中心であつたとされる説に対する再検討を問題とすべきであろう。この点については著者も今後の課題にあげているので、これ以上触れない。

また第一章で指摘されているように、近世に出版された家相書の版元は大坂と江戸にあり、地方に流通していったことは確かとしても、それらを購入した読者の多くは都市に住む人びとであり、家相書を研究して家相見として活動した者の多くも都市に住んでいたと思われる。敷地の形状や方位などで制限が大きい都市部においては異なつた展開が予想され、重要なテーマになるのではなからうか。終章で庭園の風水について調査研究を進めているとの記述があり、これらの課題も含めて、本書の続編が刊行される日を待ちたい。

さて論を展開する過程で著者は多くの場面で統計的処理を行

ない、表やグラフを多用している。この手法は明確な結論を導き、読者に対して説得力をもつものである。とくにグラフは視覚的に理解を助ける方法で、民俗学の研究者では今まで採用するものが少なかったこともあり、新鮮である。たとえば家相書の出版数と家相図の作成について年代を追って表したグラフでは、両者の間に確かに時間差が存在することを読み取ることができ、有効であった。しかし、家相図作成者の肩書きを表した棒グラフでは、分母となる数字が七二で、そのうち最大値の「その他」二五、次に多い「家相・方位師」九となっている。同様に、家相図二七四例のうち家族の生年月日を記載した一五パーセントについて、家族の記載範囲を示した棒グラフが掲載されているが、最大値の「主人」一三、その他のほとんどは一ないし二である。このように分母や具体的な項目に関わる数値が少ない資料では、グラフに表すメリットが少ないのではなからうか。

以上、少し細かい点まで批判的なコメントをしたが、これによつて本書の価値が揺らぐことはいささかもない。独特の用語が多用されている風水に関する輸入書籍や家相書を解説する、著者の地道な研究姿勢に敬意を表するものである。ここには一次資料を使用しない研究を厳しく批判する著者の考え方が明確に示されている。これが先行研究を批判的に継承し、さらに独自の研究成果を提示することを可能にしているといえる。

本書は民俗学の研究者が、家相について本格的に取り組んだ

はじめての成果といっても過言ではなからう。建築史の研究者の中には、家相図に関心をもつ者が多いと思われる、宮内氏の研究成果が大きな影響を与えるはずである。そもそも住居の研究については、建築学の成果が圧倒的に多く蓄積されてきた。しかし、民俗学はもちろん、歴史学や文化人類学、家政学、地理学など多様な分野で、しかも学際的に研究すべきテーマである。とくに住居観をテーマとする研究では民俗学の果たす役割が大きい。ところが民俗学の分野で住居を対象にした研究は乏しい。本著の著者である若い宮内氏の研究が今後益々発展することは間違いないが、本書に刺激を受けた新しい研究者が登場して、日本民俗学の中で住居に関する議論が活発に展開されることを期待している。